

平成26年度第3回八幡地域協議会会議録（HP版・概要）

日 時 平成26年12月12日（金）午後1時30分～午後3時48分

場 所 観音寺コミュニティセンター 研修室

委員出席者（10名）

1号委員 土井明敏 新保直美 池田昭則 荒生栄治
村上薫 加藤俊行

2号委員 後藤純子 長谷川明子 池田善幸 高橋知美

欠席委員 齊藤善之 佐藤康晴 阿部喜至夫 小松幸雄

八幡総合支所：支所長兼地域振興課長 佐藤弥、建設産業課長 後藤啓
建設産業課長補佐 土田正人、地域振興課長補佐 荒川敏男
地域振興課調整主任 深松克文

傍聴者： 後藤泉 1名

議事日程

- 1 開会
- 2 会長あいさつ
- 3 会議録署名委員の指名
- 4 協議
(1) 平成26年度酒田市人口対策事業の進捗状況について
- 5 報告
(1) 平成26年度酒田市除雪計画について
- 6 その他
- 7 閉会

【協議の概略及びその結果】

本協議会は今年度第3回目の会議であり、協議として事務局より「人口減少対策に関する酒田市の施策体系」や「若者定住促進施策」「全国各地の先進地の取り組み」などの資料を基にした説明があった。それに対し委員からは「空き家を有効利用して移住者の促進を」などの意見が出された。また事務局から「平成26年度酒田市除雪計画」について報告があった。第4回目の協議題は「移住交流促進事業」のテーマを中心に開催することとした。

1 開 会

○**新保副会長** 本日はお忙しい中お集まりいただき、誠にありがとうございます。これより第3回目の地域協議会を開催します。都合により欠席の委員は、齊藤善之委員、佐藤康晴委員、阿部喜至夫委員、小松幸雄委員の4名です。会議次第に従いまして、池田会長からあいさつをお願いします。

2 会長あいさつ

○**池田会長** 皆さん、こんにちは。悪天候の中、御苦労様です。地域でも最近亡くなる人が多数おります。皆さんも健康には十分留意していただければと思います。さて、この間の11月21日に八幡・松山・平田の三地域協議会の合同研修会が開催されました。八幡地区は日向コミセンにて地域の特徴や活動内容について説明がありました。平田地区では酒田地区消防本部の通信指令課を見学し、ちょうど119番通報があり、救急車が出動するまでの流れなどがわかって参考になりました。続いてトレーニングルームを見学して、ランニングマシーンなどがありました。若干、台数が少ないかなといった印象がありましたが、かなりの利用率があるとのことでした。次の松山地区では能舞台の建設現場を見学しましたが、高額な建設費用に対し、今後の利用頻度については老婆心ながら心配するところがありました。その後、「さんさん」にて情報交換会を行いました。ほとんどある地区の会長さんの独壇場でした。以上、三地域の研修会の報告をさせていただいて挨拶とさせていただきます。今日はよろしくをお願いします。

3 会議録署名委員の指名

○**新保副会長** どうもありがとうございました。会議に入る前に、会議録署名委員の指名を行います。番号順ということになっていますので、今回は1番の後藤純子委員にお願いしたいと思います。後藤委員、よろしくをお願いします。

○**後藤純子委員** はい。わかりました。

○**新保副会長** それでは早速協議に入ります。会長が議長となり進めていただきます。よろしくをお願いします。

4 協議

○**池田議長** それでは最初に次第4の協議に入りますが、概ね1時間半くらいの意見交換と考えております。最初に協議事項の(1)「平成26年度酒田市人口減少対策事業の進捗状況等」について事務局より説明願います。

○**佐藤支所長**

～増田元総務大臣の論文（中央公論掲載）より～

- ・地方での若い女性の人口は今後も減り続ける。2010～2040年（30年間）で20～30代

の若い女性が半減する都市として酒田市の場合、山形県内の市では尾花沢市、上山市について第3位の減少率になっている。

- ・消滅の可能性がある都市は、特に秋田県では大潟村を除いて全ての市町村になっている。

～国の人口減対策について～

- ・地方中核都市、人口5万人位の定住自立圏などにある程度の公共施設などを集中させるコンパクトミニシティの構想を国で持っている。今後は各地方都市が知恵を絞り出す対応が求められ、各都市間での知恵比べみたいな形が予想される。
- ・社会減対策として島根県隠岐諸島海士町の隠岐^{とうぜん}島前高校では県内全域から生徒が通学している。
- ・地域おこし協力隊の人数を交付税を増額して現在の千人から5年間で3千人に増員する構想がある。赴任した協力員がその土地に定着するケースもあり、国でも3倍に増やして取り組もうとしている。

～資料1「平成26年度人口減少対策事業の進捗状況（主なもの）」より～

- ・自然減対策として、婚活イベント事業や妊娠子育て支援事業を実施中。
- ・社会源対策として、高校生の地元定着を図るために地元企業を知ってもらうことや求人への早期提出要請、UIJターンの促進などを実施中。

～資料2「人口減少対策に関する酒田市の施策体系（検討の方向性）」より～

- ・高齢化、晩婚化、晩産化、少産化などが進行している。
- ・今後の就労の場の確保などの人口減少抑制策が記載してある。

～資料3、資料3-2「検討の方向性（たたき台）」より～

○自然減の現状⇒婚姻数 [S57年726件→H23年453件] 273件の減

晩婚化 [S57年25.3歳→H23年28.6歳] 3.3歳の上昇

出生数 [S57年1,563人→H23年727人] 836人の減

○自然減の課題⇒婚活支援策の情報共有、出会いの機会の拡充など

- ・子どもの医療費の無料化の検討（小学6年生まで→中学3年生まで）

○社会減の現状⇒

- ・青少年人口（10～19歳）

[S40年61,933人（50.4%）→H22年27,203人（24.5%）]

- ・昭和40年の若者人口の割合が高すぎて疑問がある。
- ・若者の流出者の3割程度が戻って来ている。
- ・庄内の県立高校卒業生の約6割が県外へ転出
- ・庄内の県立高校卒業生の約4割が就職（うち庄内地域は約6割で最上地域と同等、

村山は9割、置賜が8割で庄内は受け入れ企業が少ないことを実感する)

- ・庄内の県立高校卒業生の約6割が進学（うち進学先を卒業後、庄内地域への就職希望者は約3割）
- ・なかなか地元に戻って来づらい傾向がこの数字の裏付けからも伺える。
- ・庄内総合支庁のプロジェクト報告→①就職先の企業の絶対数が少ない ②地元企業の情報を知らないまま就職活動期を迎えてしまうために情報が早い他の地域へ行ってしまふ（情報を早く入手しにくい） ③U I ターンを意識する人は多いが魅力的な情報が少ない

○社会減の対策

- ・地元企業の見学や紹介の拡大など

～資料「若者定住促進施策」の現状と課題より～

- ・地域活性化センターという所で作成した研究レポートである。
- ・若者の流出により地域の活性化が失われることを危惧。
- ・若者の定住促進を目的に、住宅や雇用、出産の助成金に取り組んでいる自治体が多数有り。
- ・大学教授の論文に「若者を単に地元にとどめるという発想は、地域の将来を考えるには不十分であり、外部から人を呼び込むことが地域の活性化に資することは今や常識化している」といった論文あり。つまり、魅力のある街にすることが大切であるとのこと。
- ・過疎地域の若者（15～29歳）の割合

（全国）昭和45年20.9%→平成22年11.3%

（八幡）昭和45年21.9%→平成22年11.2%（全国平均とほぼ同じ）

- ・八幡地域の若者（15～29歳）の人口

昭和45年1,944人→平成22年730人（1,214人、62.4%の減少）

- 島根県隠岐諸島の海士町→緊急雇用制度の活用や地域おこし協力隊、集落支援員を呼んだりして活用できる制度はほとんど活用してIターン者を迎え入れている。初めて島を訪れた人もIターンの先輩たちがいれば心強い。
- 北海道富良野町→22歳までの若年層への医療費（自己負担分）の全額助成（小さな町では可能だが酒田市ではむずかしい）
- 青森県弘前市→祖父母らと同居や近居する場合、新築やリフォーム費用の補助率を優遇させて定住促進を図っている。（酒田市ではリフォームの補助は県と抱き合わせでやっておりほぼ誰でもOK）
- 群馬県上野町→過疎地ということで現在ある地域企業の活性化のテコ入れとU I ターン者のために115世帯分の村営住宅を整備し、多くの地域に若者が分散するように建てている。
- ・酒田の現在の市営住宅については、古くなったものから順次解体して行くだろう

し、今後は時代に対応したどういった建物が適切か論議されて行くだらう。八幡の場合、余程の知恵や理由がないと建設は難しいだらう。

- ・「子育て支援」の助成金を最も多くの自治体で実施している。続いて「家賃・住宅助成金」、「新規起業・就農助成金」、「若者の結婚支援」、「結婚・出産祝金」となっており、町や村では「結婚・出産助成金」が突出している。市区においては「若者の結婚支援」が最も高い。
- ・地域に若者を増やすためには出発点として地域の魅力化が必要不可欠である。海士町に若者が多く住みついているのは、町のしかけで島を訪れた若者がその地域に魅力を感じるからであり、美しい自然といった地域の客観条件に加えて、若者がそこでどのような立場と関係をつくっていきそうかということに大きく左右される。

～資料「人口減少社会と地域の役割について」より～

- ・「人口減少社会とコミュニティ」の小冊子よりNPO法人の代表など4名の対談から抜粋

○山梨県早川町

- ・山梨県の南側の突き出た盲腸に似た部分に位置
- ・日本一、人口が少ない町（1,162人 654世帯）
- ・「南アルプス山岳写真館」があり本籍地が下黒川の写真家の白簾史朗さんの写真が展示してある。
- ・人口を増やそうという発想ではなく、地域の質や総合力を高めていく発想が必要で、そして足りない力をうまく外から借りることを念頭に置いている。
- ・自らの力を引き出す事業として「あなたのやる気応援事業」ということで様々な地域活性化のアイデアを出してもらって、いろいろな取り組みをしている。（空き家を改装したそば屋、遊休農地をブルーベリー農園、など）
- ・4年前から観光事業として「はやかわトラねこ市」という朝市を開催。（トラックと一輪車で農産物を販売）交流の場にもなっている。
- ・限界集落が増えて生活環境の維持が難しくなったため、水道の管理や集落の道の草刈りを都市住民や企業のボランティアを集落にコーディネートする取り組みをNPO法人が行っている。
- ・家族で移住する「家族山村留学制度」を実施、教育委員会でも義務教育の完全無償化の後押しをしている。
- ・この町の年間予算は25億円（うち庁舎建設に5.8億円支出）、平年は20億円前後。
- ・役場の職員は約50人

○青森県大間町

- ・下北半島の一番北に位置
- ・対談者は、まちおこしゲリラ集団「あおぞら組」の組長及びNPO法人代表
- ・農業、漁業のことを全く知らないで育ってしまう子が多く「田舎力」がすごく弱っている。交友関係など学校の中だけで完結してしまう。
- ・共同作業がなくなってくると、途端にコミュニティの足元が弱くなってくる。
(新出の場合も山道の共同作業をやめるということで集まる機会が減ってしまうので同じイメージを持っている。)
- ・一番重要なのは「濃い」人間関係が田舎になるほど大切になる。
- ・「あおぞら組」の行動3原則、①おもしろいことは、待ってても来ない、②理屈をこねる前に、まんず働け、③やりたいやつが、やりたいことをやればいい、とある。(これと似たようなのが、八幡の山添の「まんず集ばろぜ・まんずしゃべろぜ・よしやっぜ」がある。)
- ・言い出しっぺがリーダーになるようにしたウエルカム旗振りをフェリー埠頭でやっている。
- ・インターネットだと発信したところが世界の中心になる。自分の足元を見て資源を発掘し、ちゃんと1個1個発信することが大事である。
- ・「田舎の暮らしって、こんなにいいんだよ」と威張る(発信する)ことが大切である。
- ・大間のマグロをプリントしたTシャツやブリーフを「おもしろがる心」で商品開発した。

以上、八幡なり酒田なりで地域のため、皆さんの議論や発言のヒントになればと思
い情報提供させていただいた。

○池田議長 資料を含めて話もおもしろく、ありがとうございました。ご意見ご質問などご
ざいましたらお願いいたします。

○佐藤支所長 今日はこの場で「何か決めなくては」とか「あれこれしなくては」とかは、
ないので皆さんから感じたことなどフリートークみたいな形でお願いしたい。

○池田善幸委員 ただ今の説明でいろいろな情報をいただいたが、毎回、何とかしなくては
と話はしているが、やはり我々自ら動かなければと思われる。これまで農業をやってきた
が、従来は他の責任にしてきたきらいもあった。米作りなどをやっていると「天候が
悪いから仕方が無い」とか「農協や政治が悪い」などの声があり自分が悪いといったこ
とは少なかった。天候が悪ければ悪いなりに自分なりの手立ても必要だし、行政とか農
協などが原因でも、それなりに自分の生活は自分で守っていくような対策が大切だった
が、ほとんどまわりのせいにしてきた感じがする。一方で、実際にどのようにすれば良

いのか悩んできたことも確かである。地域の人口を増やすために何とかしなければと言われながら、出て行く人を引き止める訳にも行かない訳で、「出る者は追わず、入る者は拒まず」ということになろうかと思う。そのような中で、以前から「空き家対策」ということで検討してきたが、実際進んでいないのが現状だ。自分の持家が空き家になった場合でも、他人に貸すとなると、ある程度手を加える必要があるということで、そういうことも前に進まなかった原因だろう。やはり持ち主にばかり負担をさせるのではなく、改造費用の補助や税制面での優遇措置など行政面での応援があればもっと空き家の有効利用に繋がって行くだろう。

○土井明敏委員 資料の説明を聞いて、子供たちの医療費負担が酒田市では多いように感じた。財源的にはどこの自治体でも苦しいと思っているが、先進地の真似ごとでなくても酒田市でもいろいろ参考にするのも一つの方法ではないか。

○佐藤支所長 本間市長が就任して、子供の医療費軽減を保育園から小中学校まで段階的に3年刻みで上げてきた。義務教育の外来の部分だけの負担軽減だったが、若い人でも大きな病気になると多額の費用がかかる訳だが、若い人が医者にかかるのは持病があるのは別にして人数的には多くないだろう。しかし、財源的にはどこからも補助がない持ち出しの形となる。

○土井明敏委員 このような会議には各地域から知識を持ったいろいろな人達が出席されているが、もっと年齢的に掘り下げた人の参加があれば斬新な発想があるかも知れない。

○高橋知美委員 特別支援金などたまに頂けるが、それが必ず子供のために使われているとは限らない。それよりは教育費などを無料にしてもらったほうが一律で良いのかなと思われる。実際に子供のためになるような施策を望みたい。私の子供が小さかった頃は、余目のほうが補助が良くて、実際に余目に引っ越したという人も何人か居たと聞いている。隣の町の助成が良くて自分の住んでいる所が悪ければ、距離が近ければ近いほど人口は流れて行くだろう。隣町との補助の統一ではないが、うまく市町間で兼ね合いを取っていただければと思われる。

○後藤純子委員 余目の助成実態の詳細は知らないが、新1年生が無償でランドセルをもらえとか、住宅補助があるとかで様々あるようだ。余目は母子家庭が多いと聞いたことがあるが、飛島にも母子家庭が東京から移住したとニュースでやっていた。自由な独身は別にして、家庭を持って子供が出来ると、まわりの支えが大事になってくる。よく子供の虐待のニュースが出ているが、行き詰まった際の年配者の支えとかは大切であり、近所の顔が見える地域で子供を育てられればとのことで飛島を選んで移住したようだ。今回のテーマの関係でいろいろな人から話を聞いたが、「空き家が多いので空き家バンク等を立ち上げて補助制度を設けて移住しやすい環境を」とか「お得感が無いと来ない」

などの意見があった。その「お得感」というのは何かと考えた場合、この地域は季節の果物・野菜が豊富で近所から頂戴して、買わなくても済むくらいであり、そういったやり取りで都会と違った人と人との心の繋がりや支え合いも出来る訳で、この地域にはそういった新鮮で豊富な食べ物があることをもっとPRしてはどうか。あと、自分の家族が病気になって実感するのは、野菜を中心とした食生活の大切さであり、皆が健康な生活を送るために、出来る範囲内でも良いので食生活を改善する必要があるのではないかと。医療費の増大を防ぎ若い人達へ負担をかけず、医療費を減らし、その分を若い人に還元出来る形が望ましい。

○新保副会長 医療費の削減については健康診断も大切であるが、食生活や予防策を含めた保健指導が大事になる。保健師のそういった活動や病院で働いている看護師の患者への話しかけが重要である。

○後藤純子委員 80歳代で心筋梗塞で亡くなった人の血管が固くなって切れないくらいだったと長野の医師のテレビでの話であった。その医師も自分自身130kg位あった体重を、これではいけないと奮起して75kg位まで落としたという。毎朝、①体重を測る②血圧を測る③食事の際は野菜を先に食べる、ということを実践し、村の人達にも出来る人から取り組んでもらったところ、80歳代でも元気な人が多いという。高齢になって病気になると介護する人の必要性も高くなる訳であり、そういった制度のお世話にならない意味でも、もっと健康生活の大切さを行政でも声を大きくして取り組んでもらいたい。

○池田議長 若者の定住に関して加藤委員、何かございますか。

○加藤俊行委員 八幡の人口の推移の関係で、この地域の基幹産業は農業であり、昭和45年からの農業の就業人口の資料があればと思われた。酒田の袖浦地区では米作りだけではなく、畑作や園芸作物などの果樹、花、野菜をやっている、だいぶ若い人の後継者がいる。八幡の場合は米が中心であるが、米価も下がって一層魅力が無くなったと思われる。しかし、農業でも作物の範囲を広げればそれなりの収入はあると思われるし、農業をやりたいという都会の若者も最近増えている訳であり、その受け皿を図られればと思う。それと、前の八幡総合支所長がある人から八幡の林業の活性化を図ってもらいたいということで、ドイツに行って林業の実態を見てきたそうだ。八幡には多くの森林がある訳で、林業を産業としての位置付けを高めて行く必要があるのではないかと。あと、以前、市営住宅に住んでいたことがあるが、木造の家に住んだ人にとっては鉄筋コンクリートの建物は閉塞感があり、今後、市営住宅を建て替えしようとする場合、小泉アパートのようなものはやめたほうが良い。庄内町では空き家対策として効果的な施策をやっており、八幡にも相当数、空き家があると思うので自治体として借り上げるなどして、八幡地域に住宅として居住してもらい酒田市内に勤めてもらう形とか、IターンやUターンの希望者に空き家を紹介するなどの方策が必要なのではないかと。資料7に外部から人を

呼び込むとなっているが、全体の総人口が減っている訳であり、人の奪い合いみたいに感じる。もっと根本的に人口を増やすといった施策が必要なのではないか。この間も「子供を産まないのがだめなのだ」と発言した国会の大臣が居たが、そういった政治が続く限りますます先細りになってしまう訳であり、人口を増やすように全国どこに行っても同じような収入を得られるといった国の根本的な施策が望まれる。

○池田議長 若者の定住に関して他に意見のある方おりますか。

○荒生栄治委員 今、加藤委員からも話があったが、林業の関係で大沢に大きな伐採業者が2社あるが、国道344号線沿いに間伐か全伐された木材がたくさん積まれている。話によるとその木材をチップにし燃料として加工出来ればとのことだった。山間地を抱えている大沢・日向地区にとっては、そういった職場が今後出来ることは喜ばしいことであり、今後は林業を見直してもっと利用できればと思われる。そうすることで山に関心のある若者が定着する可能性もあるし、雇用も生まれるのではないかと感じる。八幡は稲作・畑作があるが、これほど山林がある訳で何か方策があればと感じる。要するに地域の財産である山をもっと見直そうということである。

○池田議長 今、間伐の話が出ていたが、間伐しないと雪で木が倒れるといったこともある。それは業者が補助金をもらってやっているのか。

○荒生栄治委員 県の補助でやっているようだ。

○池田議長 燃料の名称はペレットのことだろう。

○高橋知美委員 先程の加藤委員のドイツの話だが、その話は日本みたいに森が多い地域で間伐材をペレットに加工して、その収益を町に還元している事業のことかと思われる。その町は今では活性化して、燃料関係は無料と聞いた。森が多い八幡地域でも間伐材をペレットにして販売することにより山林が元気になるし雇用も生まれる。このような事業は日本のどこかでやっているはずなので、調査すれば八幡でも出来る可能性はあるのかなと感じた。それから、空き家対策の関係で、以前の会議で聞いた時は「空き家は個人の所有物なので市ではどうにもならない」とのことだったが、行政機関では限界があると思うが、仲介業者などに委託して、空き家の価値や売買・貸借の意思などの詳細を調査してもらい、行政機関から全国にこのような空き家があるということで情報発信するなどの斡旋が出来ないものか。

○土井明敏委員 持ち主の売買や貸借の意思確認が取れないと難しい。

○池田議長 最低限、風呂や流し、トイレなどを改修して貸し出す形だったら可能性はある

かも知れない。改修前に大工さんから見積もりをもらって貸付料の参考にする方法もある。

○高橋知美委員 この土地に一生居るかどうかわからない人は家を買わないと思われる訳で一旦借りてから、その後はこの土地に住みつくだどうかの判断をされるだろう。八幡は借りられる空き家の情報がとても少ない。

○池田議長 「八幡は近くに畑がありますよ」とかの情報提供を地域振興課でやることは無理なのか。

○池田善幸委員 人が住んでいなくても税金の支払い義務とか、それと、自分の地区は家があると「空き家でも何%か区費を払って下さいよ」となっている。そういったことから家を取り壊す所も多く、昔からの風流のある家屋が少なくなってきた。「住んでもいないのに経費がかかる」というのが原因であり、行政のほうでも「人が住むまで税金を免除しますよ」とかの措置があればと思われる。空き家問題も行政と民間の連携が大切である。個人的な感想として、現在の酒田のイメージはとても暗い感じがする。その訳を考えると、働き場所がないので若い人が来ないというのが一番である。酒田と比較して内陸の山形市や飛行場の周辺などは若者が張り付いて生き生きしている感じがする。資料の人口の自然減対策の取り組みを見ると婚活イベントなどをやっているが、単発的で終わっているのではないかといったきらいはある。73 人もが参加して 11 組のカップルが成立したとのことだが追跡調査も必要ではないのか。私も農業委員会の婚活に協力させてもらったが、今後も八幡の四季や特徴を活かした婚活イベントの定着を望む。あと空き家の関係だが地域の人々は転入する人を選べないというのがあり、悪い意味での都会的な感覚の人が入って来ると、区費を納めてくれないとか共同作業を敬遠されることがある。そういった新たな問題も発生しているのが現実であり、対策として各地区で自治会のきちとした規約の整備が大切である。

○高橋知美委員 ある地域では空き家に対して町が家をきれいにして、自治会活動に参加することなどの入居の条件を付けて貸し付けているという。それは地域や新しい入居者の双方にとっても良いことかと思われる。自分自身、各地を転居してきたせいか地域の団体に入ることには抵抗はなかったが、人によって、特に若い人などは近くに親や親戚もいない中では地域に溶け込むには時間がかかることもあるだろう。それを何かフォロー出来る集いでもあればと思うし、一緒に行こうと誘う人も重要になってくる。自分の場合は近所の人からとても親切にしてもらって助かったので、やはり地域のコミュニティといったものは大事かなと感じた。

○村上薫委員 この間、日向で秋まつりをやったが、子供たちの一輪車などで喜んでいる姿を見てとても良かったし、年配の人もそれを見て楽しんでた。そのような行事は大切である。

○長谷川明子委員 この間、山形市で集会があったが、同じ山形県でも内陸と庄内ではまるっきり生活状態が違うと感じた。庄内でも特に北庄内は夏もそんなに暑くないし、冬も雪は内陸ほどでもなく、暮らし易いと思われる。おいしい物もたくさんあり、若者に地域の良さを再認識してもらって地元の定着へ繋がればと思う。地域の良さをそれが当たり前と感じている人も多いだろう。

○池田議長 若者の多くが出て行ってしまっていて、帰って来る人が少ないのが現状で、残っているのが年配の人だけだったりすると、その人が居なくなったらどうなるんだろうと思う家がいっぱいある。隣近所が居なくなると我が家だけになるのかと想像するとぞつとする。空き家対策の件では、まわりに田畑が沢山ある訳で、若い人が入居して、旦那さんは働きに行き帰ってくる、奥さんはちょっと畑仕事をしながら子供と遊ぶというのも良いだろうと思う。総合支所でも持ち主の了解のもと空き家の中を調査して改修にどの位かかるのか積算してもらい、空き家情報の中で、具体的な貸付料を示すなどした効果的なPR方法もあるのではないか。

○土井明敏委員 八幡町時代に議員などが企業誘致に行っていたが、現在の酒田市の市議会議員を見ると何故かパツとしない感じがする。議員の活動が目に見えてこない。職業として意気込みがあるような議員が居れば八幡町時代と似たような活発な活動をしてもらえるだろう。議会で発言するだけよりも「自分はこうに動いたのだ」というのが重要だ。そういったところが歯がゆいと感じる。

○佐藤支所長 町役場の時代だと、企画課などが中心となって町長のトップセールスを含めた弱電会社などの企業誘致や工業団地の造成を少し行ってきたが、最大の誘致の失敗が国土計画(株)のゴルフ場、スキー場の誘致だった。時代が変わって円高の影響からか、日本にあった工場も中国やベトナム、タイなどの海外進出が増えてしまった。第2次産業工場的なものを今、この地域に誘致することはかなり難しいだろうし、現在、八幡には工業団地的土地はない。先程、西遊佐工業団地に家を新築すると米を1年分もらえるとの話があったが、隣近所の家がくっついているような条件の良いところに住みたい人もいだろうが、隣近所とかなり離れた所に住みたいという人はあまりいないだろう。市役所の商工港湾課という所には専門的に企業誘致の担当がいて、東京や仙台などに出向いてはいるが、なかなか有力な情報は得られていないのが現状だ。努力はしているだろうが酒田にはこれといった良いエサがないせいも厳しい。一方、プレステージインターナショナルというコールセンターは誘致に成功した。コールセンターといった職種は忍耐強い気質の東北人向けかも知れない。

○池田議長 空き家については、所有者の近くに住んでいる親戚などが入れれば一番問題がないのでは。

○佐藤支所長 八幡の空き家への入居については、ゼロという訳ではなく、この2～3年で知っている限り3～4件はあるようだ。自分の地区でも1年半位、空き家だった所に民間業者を通じて北海道のニセコ町から40代の女性に移り住んで来た。そこは築後30年は経つが手入れの良いお父さんだったので状態が良かったのだろう。

○池田議長 空き家は3～4年、人が済まないと老朽化が一段と進む。

○池田善幸委員 せっかく、このように空き家対策の話が盛り上がっている訳であり、これで終わるのではなく、実際に実のなるような話を持って行ければと思われる。市役所の空き家対策室みたいな所と連携は出来ないものか。

○佐藤支所長 まちづくり推進課に空き家対策が数名いる。八幡総合支所にも空き家の資料はあるが、個人の財産の情報開示には一定のルールがある。

○後藤建設産業課長 総合支所の窓口に来ると、「こういった空き家がありますよ」ということで写真と場所だけは紹介しているが、斡旋などはしていないので直接本人が持ち主と交渉してもらう形になっている。

○池田善幸委員 そこをもう一步踏み込めたら前進するだろう。現状のままでは駄目だ。

○加藤俊行委員 庄内町で空き家の水回りを自治体で補修して、移住希望者に紹介しているといった先進事例が近くにある訳なので、一度視察に行ったほうが良い。

○佐藤支所長 余目は商店はある、病院もある、駅もある、位置的にも鶴岡と酒田の中間であり、定住支援で住宅取得補助金として100万円を出したり、ランドセルを配ったりして、町長が力を入れている。

○池田議長 空き家が千件あるというのは酒田市全体か。

○佐藤支所長 そうだ。八幡だけだと百件まではいかない。

○池田議長 人が住めるような状態の家はあるのか。

○後藤建設産業課長 沢山あるが、持ち主の気持ちとして人に貸すのを嫌がる人も多いようだ。そこが空き家の有効利用に対しネックとなってくる。

○佐藤支所長 引っ越して行く場合、墓の処分をしなければいけないケースもあり、クリアすべきものは少なくない。八幡の空き家は人が住めるような状態が良い場合、貸してい

る物件はあり、同じ家に自宅の建て替えなどで入れ替わり立ち替わり入居しているケースもある。人が住まなくなると年々壊れて行くが、そういった問題のある空き家対策をしているのが、まちづくり推進課であり、「空き家を有効利用して活性化させる対策を」というのが皆さんの今回の会議の意見である。また、空き家の詳しい所有者を調べたいものの、所有者の税情報を明らかにすることは法律上出来ないという壁があるが、そのため、空き家のために迷惑を被っているまわりの人を優先すべきでしょうと法律改正の動きが出ている。

○池田善幸委員 痒いところに手を差し伸べるのが行政の役割と考えるが、現状では、まちづくり推進課に行っても危険な空き家のチェック程度で有効利用の点では当てにならないということだ。

○佐藤支所長 チェックだけでなく、危険対策の呼びかけなどは行っている。

○荒生栄治委員 更地にすると、固定資産税が上がるのか。

○佐藤支所長 上がるのではなくて、今までの建造物により軽減されていた税が解体によって元に戻るのだと役所的な回答をしている。

○池田善幸委員 婚活事業にしろ何にしろ「やりました、終わりました」で、市はその後のフォローがない。地域協議会の委員として市に提言する方法もある。空き家の個人情報の開示は難しいとのことだったが、利活用に向けて私どもも動くべきでは。地域協議会では空き家の件で以前から話をしてきたが、何ら進展していない。このままでは毎年同じような話をする事となるだろう。NPOやボランティアなどの民間が調査の窓口になって情報を提供し、空き家を利活用してもらいようなことをどうすれば具現化できるか事務局から動いてもらいたい。

○池田議長 今はインターネットの時代であり、クチコミよりも、例えば酒田市の八幡のホームページに「畑付きの空き家、たくさん有ります」とかの掲載が出来たらと思われる。ネットの影響はとても大きい。

○佐藤支所長 ニセコから来た新出の件も、ネットで調べたらしい。定住促進を図るためには八幡の空き家全部載せなくても良いので、目ぼしい物件を例えば坪数に分けて多様に数十件載せるとかはあっても良いのではと思うところだ。

○池田議長 やるべきだと思われる。家の改修などで大工さんの仕事も生まれる。

○高橋知美委員 自分もこちらに引っ越す際はネットで調べた。空き家の斡旋事業で雇用も

生まれる。

○佐藤支所長 空き家の調査斡旋などは、役所でなくても、会社にある程度の委託料を払って効果的にやる形もある。

○高橋知美委員 最初は委託から始まって、軌道に乗ったら行政が手を離す方法もある。

○池田善幸委員 遊佐町の吹浦で自然が好きな埼玉の人が来て家を借りていたらしいが、ボイラーが壊れた関係で、家の所有者から私あてに「升田に空き家がないか」との問い合わせがあった。やはりそういった都会の人で自然好きな人もいる訳であり、家の補修の関係で地域のイメージが下がるようなトラブルにならないためにも、補修の負担区分を明確にしておくことも大切である。

○佐藤支所長 地域協議会の第4回目があるので、次は、空き家対策を最終的にどのような形でまとめて行くのかといった内容で開催したいがどうか。

○加藤俊行委員 除雪の関係で、今年の除雪は去年提言したせいかととても良かったが、日が照って雪が溶けかかって、道路がデコボコ状態の時にすぐにぬけてもらえればと思う。そのまま翌日になると固くなって道路状態がとても悪くなる。

○土井明俊委員 第4回目で聞きたいのは、過疎債による八幡町時代と合併してからの予算配分の比較と使い道、もうひとつ「ふるさと納税」関係で実際に酒田市に入っている金額やお礼の物品を教えてください。

○佐藤支所長 物品の内容はネットに載っているが、金額は掲載されていないので次回に報告したい。

○土井明俊委員 婚活イベントの関係で、先程、池田委員が言われたイベントの回数を増やして春夏秋冬の自然を活かした季節ごとにやるのも一つの方法かと思われる。

○佐藤支所長 松山地区で明日、婚活イベントが開催され、男子が松山の人のみで30人参加する。「愛里人(らぶりびと)」といった男性だけの団体があり、それが主体となって行政にも働きかけて予算確保をしながら活動している。八幡でも、独身の男性たちが結婚を目的にした団体でも作って役所へイベントの相談を依頼するようなことがあれば、応援の仕甲斐がある。やはりこういったものは、地元の参加者が少ないとなかなか力が入らない。地元の盛り上がりや緊迫感が残念ながら少し欠けている感じだ。もしかしたら、他の地域の婚活イベントには参加しているのかも知れないが、今のところ、そこまでは調査していない。

○土井明俊委員 参加した小泉二区の男性に「八幡の女性はいたか？」と聞いたところ、「いなかった」とのことだった。

○佐藤支所長 やはり地元の人には恥ずかしさからか、参加しづらいといった面は確かにある。でも、年を重ねるにつれ条件が難しくなっていくので、恥ずかしいとも言ってもらえないのだが。

○池田善幸委員 女性は35歳を過ぎると、適齢期を越して出産する確率が年々下がると言われている。そのせいか女性は35歳位になると、結婚を焦っている場合が見受けられる。

○高橋知美委員 もし、私が35歳で独身だったら絶対に地元の婚活イベントには参加しない。恥ずかしいので場所を代えて他に参加するだろう。

○池田善幸委員 案内に、あからさまに「婚活イベント」と明記されると来にくいと言われる。それを「鳥海登山のグループを作るので実行委員になってくれないか」とかすると喜んで来ると言う。

○佐藤支所長 その方法は、来年度に使えればと思っている。

○池田善幸委員 地元「ららら」という直売所があるが、春はタケノコ祭り、秋はきのこ祭りといったイベントをやろうということで決定した。一方、タケノコの皮むきは大量だと家に持ち帰っても容易ではなく、持ち帰りづらい。イベントのやり方にも工夫が必要であり、婚活も「男女別に並んで下さい」といった杓子定規のやり方では、恥ずかしくて来れないだろう。

○佐藤支所長 それでは、次回の第4回目は今回、話し合われた流れに沿って開催したい。

5 報告

○池田議長 それでは、次に除雪作業について説明願います。

○後藤建設産業課長 ～平成26年度酒田市除雪計画について説明～

- ・各地区の自治会長へ説明済の資料である。
- ・基本的に降雪深が10cm以上、予想される場合に除雪機械が出動する。
- ・市道でない部分の自主除雪作業補助金については現在13団体が対象。
- ・小型除雪機械購入補助金については、今年度はまだ申請は来ていない。

○村上薫委員 大台野と湯の台の崩れ防止の工事した県道は今年から除雪に入るのか。

○後藤建設産業課長 工事は終わっているが、雪の状況を見て、庄内総合支庁で判断する。
現在、通行止めにはなっていないが、この間の積雪の件もあり、ぐるっとバスの通行は
自粛している。

6 その他 なし

7 閉会

○新保副会長 今日は、皆さんの意見がいろいろ出まして、何か糸口が見えてきたような感
じがしますので次回に繋げればと思います。それでは、これもちまして第3回目の地
域協議会を閉会いたします。委員の皆さん、事務局の皆さんありがとうございました。
ご苦労様でした。

以上